

佐賀新聞 2010(平成22)年11月27日(土) 県内文化欄 文化時評2010【美術】

(第三種郵便物認可)

美術

野中 耕介

今月は佐賀大学文化教育
学部美術工芸科生らによる
「第52回総合展」(県立美
術館、28日まで)と「20
10呉福万博」(呉服町商
店街他、12月5日まで)に、

観衆と作家の「つながり」

興味を引かれた。理由は両
展のテーマにある。それぞ
れ「つながるアート」「街
とアートと美術学生の」接
近と結束」。これらの奥に
作家や画壇、また美術教育、
美術館を含めた現在の美術
の状況、そして内在する問
題等、実に多くのことが透
けて見える思いがするので
ある。

画展の参加作家らはどの
ように他者―観衆鑑賞者、

大衆―と「つながり」、「接
近と結束」を束たそうとし
ているのか。「総合展」で
は小学生との共同制作の企
画をはじめ、会場の各出品
作品には作者による解説、
制作のコンセプトの概略等
が付してある。

開催にかかわった人々の
写真も飾られ、作家と他者
との有機的な「つながり」

が強調されている。「呉福
万博」ではギャラリー―
クのほか、私が来場した際
は参加作家の一人が終始展
示のガイドを務めてくれ
た。両会場とも観衆が自由
な感想を記すアンケートや
雑記帳が用意されていた。
多様な取り組みに若き作家
の並々ならぬ熱意を感じ、
苦心がしのばれるが、これ
らほかに各美術館の手法
をほつちつとせせるもので

もあり、それゆえに、その
限界も自ずと見えてしまっ
たのである。

「大衆」は会場に訪れ、
作品の前に立つ(鑑賞する)
ことで「観衆」となる。両
展とも大衆および観衆への
情報発信、意思の表明は実
現できており、その点は成
功していると思うが、どこ
か物足りない印象を受ける

のは、私が最も知りたい、
見たいと思う「つながり」、
すなわち作品を通して生ま
れる観衆と作家の「つなが
り」が、展示からはうかが
い知ることができないから
である。

これはパーソナルな感覚
の領域の問題であるが、例
えば観衆と作家とのやり取
り―共感する喜びや美意識
の衝突といった、感性とこ
とばの往來の様子を何らか
の方法で見せることは可能
である(もしかしたら呉福
万博では、そうした場面が
あったのかもしれない)。
そして、アンケートと観
衆との対話を軽んじてはな
らない。それらのことばは、
自身の芸術性を高めてくれ
る貴重な助言になり得るだ
けの存在ではなく、現在の
観衆、その感性の実相であ
り、時代の証言としての価
値がある。それに気づくこ
とで、美術作家、あるいは
美術教育者としての自らの
立脚点、方向性がより明確
に見えてくるのではない
か。両展とも熱のこもった
良質の展覧だったが、作家
と作品、そして観衆の關係
を今一度問うてみる姿勢を
より強く打ち出していれ
ば、一層野心あふれる刺激
的なものになり得ただろう
というのが正直な感想であ
る。(県立美術館学芸員)

文化時評

2010